都道府県別賞一等

祖父の笑顔よ、永遠に

高知県　南国市立香南中学校　二学年

高﨑　琴都

五年前、祖父は背中の粉瘤の摘出手術をした。祖母に「背中の瘤が大きくなってきたんじゃないかえ？」と言われたことが発端となり、形成外科に入院したのだ。家族みんなその急な事態に戸惑っていた。私はその頃小学三年生で、あまり難しいことはわからなかったが、祖父の体のことだけが心配で心配でたまらなかった。それでも祖父の「大丈夫よ大丈夫。」と、こんな時も笑顔で言う姿を見て安心していた。そして無事手術を終えて、退院できたのだった。

それから中学二年生になった今、祖父にあの頃の話を聞くと、

「今はボヤッとしか覚えてないけど、そんなに辛くはなかったね。」

と、答えた。

「そうなんや。あと琴都さ、生命保険の作文書きよるんやけど、保険入ってたからよかったこととかあった？」

「そりゃあるで。入ってなかったら何百万円も手術とか入院とかにお金が必要やきね。入ってよかったもんよ。」

と、自慢気に言った。

「えー！生命保険入ってなかったらお金ってかかるの！」

私はそこで初めて知った。同時に、生命保険の重要さまでもが伝わってきた。祖父はこう続けた。

「あともう俺は、死っていうことも考えないかん歳になってきたきね。生命保険入ってなかったら琴都たちも生活できんなる可能性もあるんやからねえ。未来のためにってことも考えちゅうよ。」

私は死という言葉を耳にした瞬間、苦しくなった。死を見たり聞いたりするとすぐに泣きたくなる私の心は、いつかその現実を受け止めなければならない日は来るとわかっていたはずなのに、まだ考えたくなかったのだ。でも未来のことを考えてくれているだけで心が軽くなる気がした。

「じいちゃんなら大丈夫よ！まだまだばあちゃん共に元気やし、絶対長生きするで！」

私なりに精一杯言った。祖父は「うん、まだまだいっぱい動くわ。」と笑って見せてくれた。私はその時思ったのだ。今からもしものことを考えておくべきだなと。

そんな出来事があってから、前より祖父との時間を大切にしている。祖父と

過ごす当たり前が崩れてしまう前に、もっと共に長い時間を過ごしたいなと思ったからだ。学校の送迎も、髪を乾かしてくれる手も、「琴都」と呼ぶ声も、全部全部当たり前じゃない、祖父がくれる優しさだった。それは紛れもなく宝物で、永遠ではない。もしもの時が来ても、慌てて悲しむより、この時間から少しずつ思い出作りをしていこうと努力している。

そして私は生命保険について今からよく考えている。なぜなら、祖父から学んだことがたくさんあったからだ。過去の祖父の現実を目の当たりにしてから、日々はリスクとの戦いだと深く感じた。詳しく言うと、私たちはいつも死と隣り合わせで、いつかはその日が訪れる。それは誰にも逆らえない決まりだ。でも、生命保険に加入すると、万一の保障ができて家族も自分も安心できる。こんな利点があるから私は将来、生命保険に加入したいなと思っている。

「じいちゃんは、琴都が結婚式を挙げるまで絶対死ねんで。」

こんなことを祖父は何回口にしたか。私はその夢を本気で叶えてあげたいと思っている。祖父のあの温かな笑顔が永遠に見たい。ただそれだけだ。だから万一のことに備え、将来も見据え、毎日真剣に覚悟を持って、私は生きる。